



寒暖差の大きい日が続いています。11月は受験に加えて最後の定期考査、そして卒業研究も本格化します。ここから卒業までは高校生活の集大成の時期です。体調に気をつけながら、ひとつひとつ丁寧に取り組んでいきましょう。



## 11月の予定



		行事	弁当
1	金		要
2	土	父の会聖書サークル(16:00~Sr. 田口)	
3	日	文化の日	
4	月	振替休日	
5	火	母の会聖書サークル(10:30~ Sr. 新庄)	要
6	水	追悼ミサ 5・6限(13:30~15:00)	要
7	木		要
8	金		要
9	土		
10	日		
11	月		要
12	火	全校朝礼	要
13	水	梅干し弁当募金⑥ 職員会議	要
14	木	聖フィリピン・デュシェーンの祝日全校朝礼	要
15	金		要
16	土		
17	日		
18	月	聖フィリピン・デュシェーンの祝日 学校バス冬期ルート運行開始	要
19	火	母の会聖書サークル(10:30~ Sr. 田口)	要
20	水		要
21	木		要
22	金		要
23	土	勤労感謝の日	
24	日		
25	月		要
26	火	後期中間考査①	※
27	水	後期中間考査②	※
28	木	後期中間考査③	※
29	金	後期中間考査④	※
30	土		

☆ ※の日は、必要な方は昼食をご用意ください。

☆ 行事予定は暫定のものです。大きな変更がある場合には、一斉メールや学校ホームページ等でお知らせいたします。

☆ 11月18日から、雪による交通渋滞に備え、昨年度同様に学校バスの巡回ルートを一部変更します。該当生徒には11月1日に詳しく説明します。

## 夏期研修報告会

9月26日(木)に夏休み中に韓国、オーストラリア、SOFIS(聖心姉妹校)の三つの研修に参加したグループ、個人が研修の内容や学んだことを報告しました。



## 百合の行列

10月3日(木)の朝礼で、百合の行列を行いました。  
 マリア様の生き方にならい歩んでいけるよう一人ひとりがその思いを一輪の百合に託し、祈りを捧げました。



## GIアクションプラン報告会

10月3日(木)の3・4校時に、4月からGIの授業で企画・実行してきたアクションプランの内容、手応え、取り組みを通して学んだことや苦勞したことを、グループごとにプレゼンテーションし、お互いに共有しました。



## 梅干し弁当募金

10月16日(水)に行われた梅干し弁当募金は総額 **15,000円** が集まりました。今回は北海道盲導犬協会に寄付いたします。ご協力ありがとうございました。

## Congratulations!

第70回札幌市読書感想文コンクール

北海道高等学校 PTA 連合会石狩支部長賞

高3 田中佐和

## 修養会

10月8日(火)に修養会が行われました。日々の生活をふり返り、自己を見つめて、新たな発見や意味を感謝のうちに見出す機会として大切にしている行事です。

イエズス会の林神父様をお迎えして、「それでも、私たちは熱く輝く！そして路を拓く！喜びが待っている！」をテーマにご指導いただきました。



## ホームカミングデー

10月6日(日)にホームカミングデーが行われました。前日までは雨が続き、天候が心配されましたが、当日は幸いなことに好天に恵まれました。1000人を超える卒業生とそのご家族、旧職員が宮の森の校舎に集い、ミサでのお祈りや、懐かしい方々との歓談、校舎を見て回るなど思い思いのひとときを過ごされていました。



## 今月のこころのことば

### 「人は決して一人ではない」

私が本校に赴任した2018年は、200年前に帆船レベッカ号で聖フィリピン・デュシェーンが開拓地アメリカへの出発を記念するレベッカ・モーメントの年でした。

1818年3月にフィリピン・デュシェーンら5人の修道女を乗せたレベッカ号は、フランスのボルドーから船出しました。ジロンド川を下り大西洋へと出たレベッカ号は、船酔いだけでなく命の危険を感じさせるほどの酷い嵐にあい、時には船窓が飛ばされて船室内が水浸しにもなったとのこと。船はカナリア海流に乗って赤道近くのアフリカ西海岸へ4週間程かけて南下してから、今度は貿易風を受けて北大西洋海流に乗り、7週間程かけてアメリカのニューオーリンズの港に導かれました。約8,000マイル(15,000km)の航海は、現代の客船の十分の一の時速3~4ノット(7~8km/h)の船足だったと推測されます。壊血病になりながらも、みこころの祝日に下船することとなったフィリピンら5人の修道女たちは、陸に上がるとすぐに感謝のあまり膝まづいて地面に接吻をしたそうです。船旅の疲れを癒やすのに6週間滞在した後、今度はそこから更に蒸気船フランクリンに乗り込み、ミシシッピ川を40日かけて北上し、セントルイスに上陸したのです。

この航海はいかに過酷なものだったか想像するに余りあります。私はヨットで太平洋や日本海に10日間1,000マイル程の航海に出た経験があります。海は荒天と風の繰り返しで、私の体は揺れと濡れに翻弄され、水や食料にこそ困ることはなかったものの、自然界の洗礼を受けました。私にはこのレベッカ号の航海に耐えられる自信はありません。フィリピンがマグダレナ・ソフィアと共に開拓地の人々と共に働く夢を分かち合ったところからこの旅が始まりました。その夢を追い学校をつくるというエネルギーはどこから湧いてくるのでしょうか。使命感なのでしょうか。私は思います。神と人を愛し、神と人に愛され、「人は決して一人ではない」という信念がそうさせたのだと。

(教頭 柳澤伸壽)

